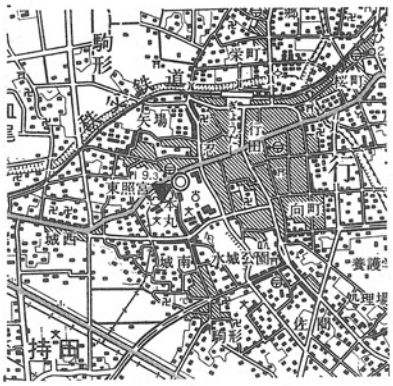
埼玉・忍（おし）城跡

1　所在地　埼玉県行田市本丸
2　調査期間　第二次調査　一九八七年（昭62）六月～一〇月
　　第三次調査　一九九〇年（平2）五月～七月
3　発掘機関　行田市教育委員会
4　調査担当者　塚田良道
5　遺跡の種類　城館跡
6　遺跡の年代　一六～一九世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

忍城跡は、埼玉県の北端部に位置する行田市のほぼ中心部に所在する。あたり一帯は利根川と荒川にはさまれた平坦な扇状地で、かつては両河川につながるいくつもの小河川や沼が存在していた。忍城はこうした低湿地を利用して造られた平城である。（熊谷）遺跡の標高は二〇m前後を測る。



文明一一年（一四七九）閏九月二四日付の別符三河守宛足利成氏書状（別符文書『新編埼玉県史』資料編5　九九八号文書）によると、築城は文明年間頃と考えられる。戦国期には成田氏、江戸時代には阿部、松平氏の居城であった。明治時代に入って城は破却され、現在城郭の痕跡を示す遺構は、わずかしか遺されていない。

調査は、城址公園の整備（第二次）と、学校の体育館建設（第三次）に伴うものである。

第二次調査では、本丸と二ノ丸との間の堀が調査対象となり、幅二五m、深さ三mに及ぶ堀と、本丸と二ノ丸とを結ぶ橋脚を検出した。橋は、①一六世紀、②一六世紀末～一七世紀前半、③一八世紀前半の三回付け替えが行なわれていた。このうち三回目の橋の付け替えについては、それに関わるとみられる多数の加工木材片が出土し、木簡(1)はこれらと伴出した。木簡が出土した層位の直上には、一七八三年に噴火した浅間A火山灰が薄層として堆積していた。遺物は、陶磁器をはじめ、瓦、木製品、漆器、金属器、動物遺存体など、多種類のものが、多数出土している。

第三次調査では、阿部・松平両城主の御殿のあった二ノ丸の西側の堀が調査対象となり、その一部を検出した。遺物としては漆器と木製品が少量出土した。木簡(2)は、木簡(1)と同じく、浅間A火山灰の薄層の直下に位置する層から出土した。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「御本丸御橋□」　293×40×4　011

　　・「　　東　　」

(2)　「忍行田」（焼印二ヵ所アリ）　331×(26)×10　081

(1)は、杉の柾目材を使用しており、長さはほぼ一尺にあたる。表裏ともに文字のほかに、墨で斜線がひいてあるものの、その意味は不明である。橋の構築に関わる加工材とともに検出されたことと文字の内容から、橋に用いる材木の付札、あるいは大きさからみて、尺木など、いくつかの用途が推察される。共伴遺物として時期のわかるものに一七世紀後半～一八世紀前半の肥前陶磁があり、浅間A火山灰層の下位から出土したことも考慮すると、(1)は一八世紀前半頃のものと考えられる。

(2)　(1)

(2)は左半分が欠けていて、全容は不明である。杉の板目材を使用している。形態は、上が厚く、下へいくほど薄くなっており、裏面上部には縁が角張らないよう丁寧に面取りが施されている。共伴遺物で年代のおさえられるものはないものの、層位的にみて一八世紀前半のものである可能性が高い。

9　関係文献

行田市郷土博物館『忍城跡の発掘調査』（『行田市郷土博物館研究報告』一　一九八九年）

（塚田良道）